42 静岡移住後の徳川家の家臣と士族授産

～不毛の地牧之原に挑んだ者たち～

1867（慶応３）年10月の大政奉還、この時点でもまだ江戸幕府の崩壊を予期し得た人物は討幕派首脳以外ごく少数だった。まして大多数の幕臣やその家族にとって、まさか現実になるとは思いもしない出来事であったに違いない。しかし崩壊は彼らの生活基盤をも一挙に危ういものとした。朝敵にされた徳川家は、皇女和宮や天璋院篤姫の必死の嘆願もあり家名存続が許された。幕府時代の約１割にすぎない駿河・遠江70万石の領地の新藩主には、後の徳川家達が就いた。水戸で恭順していた前将軍徳川慶喜も、謹慎生活を静岡で送ることになった。

１　警戒されていた静岡藩と旧幕臣たち

旧幕臣たちは新政府に仕えるか農民や商人になるかの道を迫られたが、新政府に仕えることを良しとせず、無禄でも徳川家に従い新領地に移住する道を望んだ者も多かった。しかし縮小された静岡藩に任官できた者はごく一部にすぎない。大部分の者は、江戸の役宅から退去を迫られ、1868（慶応４・明治元）年８月～10月頃までの間に、先の見込みがないまま家族共々駿河・遠江に移り住んだ。1871年段階で県内に在住した旧幕臣総数は13,764人余にのぼるので、その家族や従者も含めれば数万人規模の移住が行われたことになる。むろん新政府に反感を抱く者も多く、発足間もない明治新政府は静岡藩や彼らの動向を非常に警戒して、〈史料１〉のように密偵による探索報告も行われていた。資料冒頭の「徳川新従三位」とは６歳の徳川家達である。次の「慶喜」は徳川慶喜で、宝台院は２代将軍秀忠の生母西郷局の菩提寺である。自身に注がれる新政府の厳しい目を誰よりもよく知る彼は、疑念をもたれないように、謡曲や和歌などに専念していたことがわかる。以後慶喜は、油絵、写真、狩猟、投網、囲碁、自転車など多彩な趣味の人として余生を生き抜いた。移住後の旧幕臣たちの困窮ぶりと同時に、それを受け入れた駿遠の人々の困惑も〈史料１〉からはうかがえる。

〈史料１〉静岡藩政に付尾崎弾正小巡察探索書　明２・９月

〔前略〕駿遠両国
一徳川新従三位殿ハ静岡浅間神□新宮鎮雄宅へ寓居、
一慶喜ハ静岡宝台院ニ寓居、日々楽譜を歌ひ、或ハ和歌を詠し抔致し、陽ハ謹慎ニ相見へ候由、新門辰五郎（元鄙人也）を愛し居候事、〔中略〕
一新番組二百廿人余、久能山・宝台院警衛致し居候処、今般王臣ニ相成、事を残懐ニ思ひ、帰農を願ひ出候処、勝安芳等段々説得致し、遠州金谷之原を右之輩に開墾地ニ被下、七月下旬より家族引連移住仕候得共、未タ開墾ニ相成不申候、〔中略〕
一駿遠両国市中ハ不及申、在々迄人数充満致し、活計之為菓子或蕎麦小間物等種々之品物を商ひ、其日を送り居候者許多候事、附り、魚釣に行者又多し、
一両国城下及ひ在々ニ長屋沢山ニ出来仕候得共、皆百姓ニ普請を為致候故、家賃を出し住居ニ相成候間、右長屋え引移る事を不好者多く候事、
附り、是迄市中及ひ在々ニ寓居之者ハ、用宿ト唱へ無賃ニテ民家を借請、出立之折僅計り謝義を致す者も有之、不致して立者多し、
一所々之地所開拓ニ取掛り候得共、何れも水ニ乏敷故、田ニハ不成趣、〔中略〕
一中泉在住之藩士、山を伐、日雇銭を取、活計ニ致し候事、〔中略〕
一駿遠総躰之人民、藩士入込ミ以来益困弊ニ及候事、
但シ人数のみ相増、米穀野菜等不足ニ付、困弊ニ及ひ候也、〔後略〕
（『静岡県史』資料編16近現代一　89頁）

静岡藩首脳であり新政府への窓口でもあった勝安芳（海舟）や山岡鉄太郎（鉄舟）は、藩や旧幕臣たちが新政府から疑念を抱かれないようにしながらも実力をつけ、生計の道が立つようにする必要性を痛感していた。藩が教育を重視して静岡学問所や沼津兵学校を開き、人材育成に努めたことはよく知られている。経済面では、渋沢栄一の建議により商法会所を設立して資金運用の活発化を図るとともに、各地で旧幕臣たち

に帰農・開墾等の授産事業を勧めた。〈史料１〉にもその試行錯誤の姿が垣間見える。特に傍線部の新番組による牧之原開拓は代表的な試みであるが、現実はたやすいものではなかった。

２　新番組による牧之原開拓の現実

1868（慶応４）年２月、恭順する慶喜を警護する目的で、精鋭隊が結成された。彼らは徳川家達の護衛をして駿府に入り、新番組と改称、徳川家康の廟がある久能山を警備し周辺に居住した。隊長中条景昭のもとに結束していたが、版籍奉還で任務も解かれ暴発の心配もあるなかで、勝安芳らの働きかけに応じ、不毛の地牧之原に帰農、開拓を決意したのである。

1869（明治２）年６月、牧之原ではにわかに検分が行われた。７月、新番組は金谷原（牧之原）開墾方に改組され、藩より約1,425町余の開墾を命じられたが、このなかには地元の村々の秣場も含まれていた。頭の中条、頭並の大草高重以下約200戸余りが移住、翌年には元彰義隊ほか84戸が加わり、合計約300戸余りの士族が新規開墾のために入植したことになる。彼らは中条組や大草組、榊原組、久保組等に分かれて茶畑の開墾にあたった。当時横浜港からの主要輸出品として茶の需要が拡大しており、茶畑の開墾は時を得たものであった。

しかし、慣れぬ農作業に加え農具、住居、食料のすべてに自活の道を計らねばならない悪条件が彼らに加わった。幕臣の誇りと覚悟はあっても、体調を崩す者も多く開墾を断念する者もでた。そのため力を合わせ開墾を続ける者がいる一方、農民を賃雇いや小作にして開墾させる者もいた。茶樹の栽培は徐々に進み、1878年には200余町の開墾が進んだが、現実には士族だけでなく農民の力も大きかったのである。

〈写真１〉牧之原茶園に立つ中条像

さて、現在の牧之原台地に広がる茶園を開墾したのは彼らだけではない。江戸時代、台地の眼下に流れる大井川には橋が許されず、人々は川越人足の手を借りて渡河していた。ところが明治維新後は渡船が許されるようになり、1871年１月、人足たちは転業を迫られた。救済対策として開墾事業が実施されることになり、元金谷宿世話人の丸尾文六らが世話人となり、開墾計画を立案、百戸の人足を３組に分けて各開墾地に入植させ、茶園の開墾を進めた。彼らの開いた茶園は1878年には約41町余に広がっていた。

1878年11月に中条、大草は静岡行在所で明治天皇より開墾の功を賞された。しかし栄誉とは裏腹に、士族たちの生活は困窮の度合いを強めていた。それは、小額ながらも支給されていた開墾手当が廃藩でなくなり、家禄廃止に代わり与えられた奉還金を出資し相互融資を目的に設立した苟美館も、巨額の未回収金を出し解散に追い込まれた状況にも現れている。茶園経営を成功・拡大させ製茶技術の改良に努める者もいる一方、経営維持のため村々や農民への借財を拡大させる者も多かった。士族間の格差・分裂・対立は進み、1878年の時点で215人いた士族は、松方デフレ期に茶の価格が下落するなかで５年後には約118人に半減、その後も士族の数は減少し、ほとんどが牧之原台地からその姿を消していった。しかし撤退した士族たちの土地は、彼らに資金を融通していた村々や農民、地元有力者が買い取り、茶園として再生した。士族たちから学んだ製茶技術もさらに改良を重ねて受け継がれた。こうして牧之原は現在の大茶園の姿に至るのである。

〈参考文献〉
前林孝一良『徳川慶喜　静岡の30年』（静岡新聞社）
前田匡一郎『慶喜邸を訪れた人々―「徳川慶喜家扶日記」より』（羽衣出版）
山下太郎『明治の文明開化のさきがけ―静岡学問所と沼津兵学校の教授たち』（北樹出版）
樋口雄彦『旧幕臣の明治維新―沼津兵学校とその群像』（吉川弘文館）
平井行男『幕末旗本士族と土―牧之原開墾ものがたり』（新人物往来社）